

寄書

○積年の習慣を破るべし（第三編）

海外人に對する日本婦人の心得

東京婦人矯風會々末 佐々城 豊壽

夫邦國の文明と云ひ野卑とは其國物貿の上より觀察を下したる名稱にして假令二名の賢人君子あるも他の數万人は野卑たりあらば其國は矢張り野蠻の部に數へらるべし又假令少の頗惡者あるも多衆人民の風俗高尙ならば其國は文明と稱せらるべと即ち多衆人民の風俗は一國の誇美であれべしされば一個の風俗も集りて一國の風俗を成す物あれば又一個の野卑なるも高尚あるも其國より重大の評判を受ける事と知るべし近く譬へて申さば西京の人と云へば優美に思ひ笠原島の人と云は野卑の如く思ふが如し能之を判定を見るならば西京の人にも武骨ものもあるべく小笠原島にも風雅の人もあるべし然りあがら多衆人民より觀察を下さるゝ故武骨と云るゝも優美と云るゝも其評判致か無ものと知るべしさて又世の中と云は妙あるものよて誰も皆自分の國ほど尊き國へ無ど思ひ又自分の風俗ほど相當の風俗は無きものと思ふも數多あるとあるべし併し諺にも自惚の氣の無き人々なきものあれば奇妙なる風俗の中に包み籠られて安心して居る人も亦數多ある事勿論ありと云ふべし是今日の急務中の急務と思考すればあり

余が家の書生某三四四年間ピーナンと云へる地に滞在して歸り

來りし時の話に此土地及シャワワ又シマタラなどの國にてハ此國の人民一般に「白牛を神と尊みて之に事へ人々跪きて禮拜しえ供養の心を表すどぞ就中尤も忌しく穢らはしく見ゆるは此白牛の通行の時人々傍に立づきて禮拜し且つ白牛が道上に渡せる軟かる牛糞のある所に人々争ひて寄り集り皆々指の先にて捏ねばし夫を鉗々の額の眞中に圓く塗るとあり」定めて是は災難除と氣災炎延命とか云へる呪詛なるべし併し日本人あとの餘所の見る眼には随分馬鹿らしく考へられしとぞ又土人中に銀製の丸き環を鼻の中に垂れ下げて前りとあして意氣揚々として居るものもあり何れも本人に取りては大層の裝束を爲したる心持するべし實に習慣と云ふものは不思議あるものなり

として祈り又老人には注連を張て尊びあがめ或は之に祈禱して吉福を願ふなどの類の如きは吾々日本人は積年の習慣に包らば如何に思ひよしよ此風俗をとつて文明人士の行ふものと譽る事は莫るべし
又今日吾國內の婦人社會中非常の陋習に安んじ野蠻の風俗を以て安心し殆んど改め難きものあり否々改むる方を却て耻かしく取違へて思ふ事か有る（これは皆様何の事でしよふ何の事柄でしよふ即ち是は皆様御存し御同意の通り眉毛を剃落す事と歯を黒く染る事で有ます）眉毛を剃落せ事と歯を染る事とは自然の容貌も損じ又健康も害あり其他風俗にも關係して國內の野蠻風を現はすべき一大惡風俗で有ます外國人は此風俗に付てどれ程日本を見下げるかどれ程侮るか知れません彼彼ピーナン人等の銀の環を鼻先に垂れ下る者と同一に愚弄するゝかも知れません
又現に如此ある事が有たそふです五六年前の事とか或外國の貴人初めて日本に來りて日本の貴婦人に謁見せし時非常に驚きて頗る不審に考へたりと此外國人の思ふには東洋に評判よき日本の事されば定めて美婦人も大からんと思ひしに何ぞ

日五月三

學 女 雜 誌

料らん居並ぶ婦人へ何れも面貌の頗る異形さればありと是は左右前後の婦人ども何れも眉毛はあき故顔はのつべらばうに見へて唇は青く光り(紅の濃きためなるべし)口中は真黒く齒も皆黒き故彼のハワイ國に流行する歯病の類なるべしと見受けたりと後日人に語りしどぞ

あんと皆様外部の習慣即風俗の卑陋ある所は早く打破りて自も早く外國人の風度物を身に着けか夫には東京及各府縣に在る所の同志諸姉妹の諸君と力を協せ(結婚會ケイガヨウヒン)の人々は勿論)早く早く吾國の豊風を流ひ流して高尚の程度に進みせん事を希望致さず附ては此會の人々は己れ自ら香つて改良せねば成せん彼の昨日は來事(おこり)今日は丸歸(まどき)月は眉毛を生し今月は又剃落し亦後月は歯の染を落して今月は又濡がらすを染るよみて血管にも云ふ秋の空と女の心なりとて人に笑へるゝべし此會の人々よ已れの心に一定の磁石を置き一定の方角を定めて進み島國の言語を學ぶる事勿